The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	オスカー・ワイルド研究 : 身辺の芸術(1)
Author(s)	山田, 勝
Citation	Osaka Literary Review. 1969, 8, p. 83-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25789
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

オスカー・ワイルド研究：身辺の芸術（1）

山　田　勝

（序）

芸術とは美である。そして芸術家は美を創造する人である。従って芸術家は誰よりも美に敏感であらねばならない。いかなるものを犠牲にしても美を表現する必要がある。世期末の審美主義者をもち出すまでもなく，意気に燃えている芸術家やディレッタントたちはこれに類似した考え方を持って生きている人は多かろう。なるほど彼等の幾人かはそれを見事に表現している。だが大多数のディレッタントたちは凡人とは違うということの表現にのみ終り，風変りな様相を呈し，世間の嘲笑の的に留まる結果になっていることも事実である。これから述べるオスカー・ワイルドについて多少とも知識のある人々は彼の奇怪な aethetic costume や，多くの伝記作家たちが語る彼の一生から判断して以上のような傾向の芸術家であると解釈するであろう。確かに彼の一生の大半は虚飾と気取りに満ちたものであり，内面的思索による歓びよりも，俗物的な享楽を追い求めていた。[1] しかしそれは一つには彼の遺伝的素質によるものであり，[2] 一つはヴィクトリア朝から世期末への過渡期に生きたという社会的環境によるものである。それはともかくも大学を出た頃から巧みな宣伝を駆使して若手審美主義作家としての下地を築き，急激に社会から持て囃されるようになっていた。名声とも悪評ともつかぬ民衆の目を一身に受け，彼の作品や劇は大当りをとり，莫大な金をも手に入れるようになった。そして自分が審美主義者であるという社会的意識と経済力，そして持ち前の派手な趣味から次第に虚飾の芸術にも手を染めるようになった。そして彼が考案する人生の明るい金ぴかの世界にのみ光彩を発揮しうる生活の芸術をより効果的にするため

に人間の暗い面，落ちついた面から遠ざかるようになった。彼の天才にもかかわらず，軽薄さが非難されるのはこのためである。

> My only mistake was that I confined myself so exclusively to the trees of what seemed to me the sungilt side of the garden, and shunned the other side for its shadow and its gloom.[3]

しかしいずれにしても彼の一生のほとんどはこの金ぴかの時代であったし，この時代がワイルドを表象する時代であったことは否定できない。それらは生活をより美しく楽しいものにするための努力のあらわれであったことには違いないし，のちの服飾界，室内デザイン界は言うに及ばず，演劇界や出版界にも重大な影響を与えているのである。筆者はこの小論において小説や戯曲という大きな芸術作品とは離れて，生活に必要とされる芸術を彼はどのように促えていたか，そしてそれが彼の芸術観の本質とどのような関係を持つかという問題を講演集，手紙，評論，雑誌原稿などから考察し，それと同時にワイルドの軽薄な面と考えられている部分の弁護を行いたいのである。

第一部　「衣」

第一章　「審美主義服装発生理由」

衣・食・住とワイルドの関係を述べるとすれば，何といってもこの「衣」の項目が最も長くなるであろう。「衣」が人間の外面美を顕示するのに一番の近道だからである。美を志す人間は何も外面的な美しさにこだわることはないかもしれない。極端に言えばボロを纏っていても美学の研究は出来るであろう。美しい衣服を身につけている人間が本当に美を理解しているとは言えないのは事実である。しかし反面美学者も社会人である限り，美学者としての責任感に似たものが働いて，凡人よりも美しい何かを身につけ，自己の存在を認めさせたいという意識もあろうし，人間は誰でも衣服を着なければならないのであるから，同じ着るなら美しいものを

とするのは極めて当然であろう。

ワイルドが審美主義的服装を最初に身につけたのはオクスフォード大学卒業直前であった。大学内で催された仮装舞踏会でルーパート王子に扮し，人々に "a reformation in dress was of far greater than a reformation in religion"[4] と叫びながら部屋を出て行ったのがどうもそのきっかけのようだ。これは単なる舞踏会の余興としてではなく，彼は本気でロンドンに服装改革旋風をまき起すつもりであったものと思われる。いわばこのパーティがそのファンファーレであったわけだ。彼が後に築いた「審美的服装」の発生理由は大体以下のことではないだろうか。

(a) 遺伝

(b) 子供の頃の異常な衣服生活

(c) 田舎者意識

(d) 審美主義者としての自己宣伝

(e) 反ビクトリア主義

(f) 芸術の流れ

(g) 古典趣味

(a) 遺伝

彼の父（William Wilde）はアイルランドでは名士で[5]，ナイトの称号までもらっているが，相当の曲者で女性関係ではやたらと問題を起している人物で，特に若い頃は 'Man about Town'[6] としての名も高い。だがオスカーは父よりも母（Jane Francesca Elegee Wilde）の性質を多く受け継いでいる。文学者としての才能だけでなく，日常生活においても空想的かつロマンチックで，平凡で事務的なことを嫌い，華やかさを好む点などがそれである。特に名士の夫を持ち，自分も作家としての活動を続けているのであるから，必然的に付き合いも派手になり，社交界の回数も増え，華美なものを身にするようになった。母を愛し，母の影響を大きく受けた

オスカーはその華美な服装への憧れを母に負うところが多いものと思う。

(b) 子供の頃の異常な衣服生活

私自身はこの項目を大した要素だと考えてはいないが無視してよいとまでは思っていない。というのはこの問題に関してはヘスケス・ピアソン氏などは色々の面で重要な要素として取り上げているからである。オスカーは次男であった。ところが母は彼が生れる前から女の子が欲しくて仕方がなく，生れる以前に女の児用の衣服その他を多く取り揃えていた。ところが期待に反して男の子が生れたのであるが，母の失望ぶりは異常で，女の児への期待をまだ断ち切れず，かなり大きくなるまでオスカーに女の服装をさせていたと言われている。この経験がワイルドの後生の服装哲学に心理的にどういう影響を与えているのか私にはよくわからない。だが何らかの意識として潜在していたことも事実であろう。[7]

(c) 田舎者意識

元来，そして現在でもアイルランド人は英本土の人間に対しては少なからずの対抗心を持っている。ダブリンに生れついたワイルドはオクスフォードからロンドンという世界の花形とも言える舞台にデビューし，必要以上に自己主張を意識したと考えられる。一般的に都会へ出て来た田舎者には二類種あって，都会の洗練さに全くついて行けず，蛮カラに甘んじる者と，追いつき追い越そうとして極度に派手になってしまうものがいる。最新モードでパリの街を歩くのはパリジェンヌよりも英国やアメリカの女性が多いのもこの理由からである。わがワイルドもこの種の人類に属していたのである。

(d) 審美主義者としての自己宣伝

ある人間が若い頃から名声と富を得るためには人並み以上の努力をしな

ければその望みは達成できない。特に文化人としての地位を簡単に築き上げるのは難しいことである。ワイルドの歩んだ道もこの難しい方の道であった。当時流行の審美主義者の一人として詩や評論を書いても，それだけでは容易に名声を得ることはできない。そこで以前から服飾の美を意識していた彼はこれによって審美主義者としての自分の存在を世間にアピールしようとしたのである。彼が1879年の秋にケンブリッジ大学の学監オスカー・ブラウニング（1837—1923）に宛てた手紙に 'I shall see about your ties this afternoon. I am perhaps a better judge of neckties than of bibles,...'[8] とある。大学の教師にすら「私は聖書よりネクタイの方がよくわかっている」などと不遜なことを云うからには相当の覚悟があったものと思われるし，又「耽美主義を身をもって示すワイルド」の宣伝を心がけていたことも十分察せられる。とにかく彼がオクスフォードからロンドンに出た頃の身なりは物凄いもので，彼独自のデザインによる衣裳で街を歩いた様は Gilbert の *Patience* という劇で皮肉られた話しは有名であるし，風刺漫画誌「パンチ」にもワイルドの戯画がさかんに登場したほどである。その姿は現在でも写真が残されているから容易に知ることができるので，くわしく紹介するまでもないが，ピアソンの説明を一つ挙げておきたい。

> ...in London, where he was occasionally to be seen at evening parties dressed in velvet coat edged with braid, kneebreeches, black silk stockings, a soft loose shirt with wide low turn-down collar, and a large flowing pale green tie.... All the same his bottonholes were remarkable and he adopted the sunflower and the lily as badges or symbols of his cult, no doubt because they were too large to be overlooked. Nothing could draw attention to him so surely as strange flowers and strange clothes, for notoriety can be obtained by what one wears more easily

than by what one says or does. In this way he became publicly identified with 'the Aethetic Movement' and was soon regarded as the leader of it merely because he dresses the part.[9]

ペアソンも上記の文の最後にも書いているとうり，人というものはその言動よりも身なりで判断されることが多いのである。この意味でワイルドの悪名は彼の「審美的服装」によって急激に高まり，それと同時に「審美主義運動」の指導者としての地位も高まったのであった。悪名が名声の前ぶれであり，それが商業上有利であることは彼は計算に入れてあったのである。[10] こうして彼の名は英国のみならず米国までも知れわたり，1882年にその地に紹待されたが，大流行の唯美主義運動の権化の姿を見ようとの好奇心からワイルドのアメリカ巡業は大成功であった。何でもディッケンズ以来の人気であったと云われている。アメリカにおける講演題目は文学や芸術についてのものもあるが，それよりも粗野なアメリカ大衆に生活の美化を暗示した「衣」「住」についての講演の方が重要であったと思われる。いずれにせよ彼は「美の使徒」としてアメリカへ渡った頃が若さも手伝って外面美に耽っていた時代であった。そしてアメリカからパリへ移った時期までこの傾向が続くのであるが，次第に落ち着きをとりもどし，長髪にひまわりの花を手にするようなこともなくなっていった。たがこの審美的服装が彼の芸術家としての名声を高める上に完全な成功をもたらしたと云えるであろう。

(e) 反ビクトリア主義

「反ビクトリアニズム」はワイルドの思想のみならず，世期末文芸，ひいては世期末全体のメンタル・カレントと関連するほどの大きな問題であるから，ここでは十分に述べることは出来ない。ここでは「アンティ・ビクトリアニズム」の気持がどれほど彼の服飾観に表われているかということの指摘に留めておきたい。「ドリアン・グレイの肖像画」の第二章にへ

ンリー卿が「19世紀の衣装は鼻もちならん。陰気で気がめいって仕方がない。近代生活に残された本当の色彩要素は『罪色』だけだ」と云うところがある。この言葉にはもちろんワイルド流の誇張はあるが，彼のビクトリア朝へのレジスタンスが顕著にうかがえると思う。新興ブルジョワ階級が作りあげた道徳はなるほど人間のなすべきことと，なすべきでないことの区別，つまり善悪の区別[11]を明確につけるという厳粛な生活態度を英国民に植えつけることに成功した。ナポレオン軍を破って以来英国には大戦争といわれるほどのものもなく（クリミア戦争はあったが），着実に大英帝国の威力を世界に示していた。しかもその担い手の第一人者は何と言ってもブルジョワ階級であった。彼等の出現によって国民の貧富の差はこれまで以上に広がって行ったことは言うまでもない。資本家と労動者の関係の規模が拡大し，工場の合理化が進むにつれて失業者や貧民の群れが増加することも又当然である。こういった貧民たちの不満が募ればブルジョワたちにとって脅威となる。これを出来るだけ抑えるには謙虚な道徳を社会全般に浸透させる必要があったわけである。こうして金持連中は出来るだけ貧民にチャリティーを施しつつ，彼等自身の地歩を固めていった。又社会的に安定した時代においては教会自身も極めて形式的なものに陥入る危険性があるが，この時代も例に洩れなかった。儀式をとり行うだけの場所と化した教会は彼等中産階級との結びつきを深め，形式上の道徳を説くことに精を出していた。ディッケンズがヴィクトリア時代の代表的作家とするならば，彼の前期の小説に見られる明るく楽しい平和な世界がその表面をなし，後期のそれに見られる暗い，罪の意識に満ちた霧の世界がその底流をなすと言えるであろう。確かにこの時代は善良でまじめな人間は多かったであろう。しかし本質的に罪を背負っている人間はいかなる時代でも罪を犯すものである。しかも無理に抑えつけられた時代であるが故にその罪が一層暗く卑屈なものになっていく。まさにヴィクトリア朝の罪悪はこのようなものであった。ワイルドの「風俗喜劇」四篇[12]はいずれも時代を現代，

つまり世期末ととり，事件の鍵が過去，ヴィクトリア時代になされた「罪」に関連しているのも彼のあの時代に対する皮肉な目からなのである。ワイルドは生来の性格に加えて芸術家特有の時代に対する反撥と破壊的な精神からまっこうからヴィクトリア主義に立ち向かっていった。彼の没落の原因になったあのアルフレッド・ダグラスとの事件も同性愛を罪悪とするこの時代の英国法（それは道徳から生れたもの）に対するレジスタンスにも起因していると私は信じている。[13] さて話しは本題にもどるが，この時代に完成されたあのダークを基調とする定型化された英国紳士の衣裳も道徳から生じた謙虚を表わすものに他ならなかった。そこに何らの自己主張も豊かな人間性の発露である色彩も見られず，出来る限り没個性の努力をしていたように感ぜられる。云うなればこのヴィクトリアン・コステュームはヴィクトリアニズムの象徴とも考えられたのである。ワイルドは当然このような衣裳を排斥し，反撥と自己主張の意味から特異な服装に傾いていったのである。しかもたゞ単に不満や反撥からではなく，ヴィクトリアン・コステュームの不合理性をも改造しようとしていた（これは後で述べる）。例えばあの時代の極度に細いズボンは動きの面からすこぶる不便であり，着心地も悪いとし，もう少し太いものを採用したのも一例である。

(f) 芸術の流れ

一般的な芸術の流れと服飾とどのような関係にあるかを示すのは難しいことで，現在のところ私の能力では不可能な課題である。しかしここでワイルドの色彩観が意識的にせよ，無意識的にせよ，絵画の動きとつながりを持っていることだけは指摘しておきたいのである。絵画において写実主義（クールベーなど）は1840年代の終り頃からロマンティシズムにかわって現われたが，それらの色調はまだ暗いものであった。然るに1860年代から1870年代にはエドワード・マネー（1832—1883）やクロード・モネー

(1840—1926) が中心となり印象主義が打ち出されるに及び，色彩はずっと明るいものが中心になった。印象主義が発生した理由については色々考えられ，単に絵画界だけの現象ではないが，絵画における技巧的な面にのみ限定して考えれば，プリズムによる光線分解の成功があげられるようだ。福島繁太郎氏の著書「近代絵画」[14]の「印象主義発生」の項でこれについて次のように述べている。「プリズムによる光線分解の理論も，印象主義の確立に役立ったことは疑いない。光線をプリズムに透すと七原色に分解されるが，パレットを（画家の用いる色彩）光線分解によって得られる鮮明な色に限定し，光線分解では出ていない黒や褐色をパレットから駆逐した。そこで物の陰影を黒か褐色で現わす従来の慣習を破って，陰影は色彩を欠いた部分ではなく，光度の低いところなので青色で現わした。」[15] プリズムという科学的な面からも印象主義の発生は説明できるであろう。しかしもう一つ忘れることの出来ないのは英国画家ターナー（1775—1851）の存在である。印象派の画家モネが彼を絶讃し，その刺激を受けたのは周知のことであるが，英文学史上それ以上の貢献をターナーはなしている。すなわちラファエロ前派運動発生の直接的影響を及ぼした点である。この運動はウイリアム・ハント（1827—1910），ジョン・ミレイ（1829—96），ダンテ・ゲイブリエル・ロゼッティ（1828—82）等によって創始され，自然と人生に対する忠実な態度を忘れ，マンネリ化した16世紀以降の画壇に「自然に真実」という清新な画風を吹き込む運動であった。これは読んで字の如くイタリーの画家ラファエロ（1483—1520）がバチカン宮殿の壁画を描くために1508年フロレンスを去る以前の画風（つまり15世紀の画風ということになる）に戻そうという意味であったが，その頃の自然に忠実で生き生きとした人間性に溢れた色彩豊かな画風が図らずもターナーのそれと一致している。[16] こういうわけでターナーの風景画とその色彩に光を巧みに取り入れた技巧は美術界を始めとし，ラファエロ前派運動を通してあらゆる芸術運動に影響を及ぼしたのである。そして19世紀中・後期にかけて

「光と色彩」が一大流行をきたした。世期末の象徴色である「黄色」は色々な意味を持つだろう。それは黄金の色を現わせば，冬を知らせる紅葉を現わすかもしれない。しかし，少くとも「黄色」は（白を除いて）最も明度の高い色であり，従って印象的な色であることには間違いない。このいわゆる「イエロー・ナインティーズ」という1890年代も先に述べた色彩革命のなせるわざであった。色彩に乏しい死んだ色を基調としたヴィクトリア朝の衣服に反撥し，「ラファエロ以前」の如き生命感に溢れた衣服を身につけたワイルドの気持は十分察せられるのである。[17]

(g) 古典趣味

ワイルドの古典趣味は彼がまたダブリンにいた頃に始まるであろう。もっとも前にも言ったとうり彼の父は医者であると同時に考古学者であったからその影響もあるのだろう。それはともかくとしても彼がアイルランドのトウリニティー・カレッヂにいる頃からギリシャ語などで優秀な成績をおさめ，数々の賞を得ていたことはよく知られている。[18]だが彼の古典趣味を決定づけたのは彼がオクスフォード大学在学中[19]にトウリニティー・カレッヂ時代の恩師で，古典学者であるマハフィー教授についてイタリーを経てギリシャへ遍歴し，その地で古代の美しさに魅了されたことであった。[20]異国情緒，古代への憧れといういわゆるロマンティシズムがそれ以後の趣味にも大きく影響したことは十分考えられる。全体，彼の取り入れた服装はヴィクトリア時代の伝統からすれば数奇なものであったかもしれないが，歴史的見地からすれば決して新しいものではなかった。例えば，帽子について云えば，その時代の流行のものよりも縁の広い（broad-brimmed）帽子を採用していたが，それはもっと以前（17世紀頃）の流行したものであった。又彼が好んで身につけた黒のベルベットのコートなどはルイ王朝に最盛したものである。ケープ（cape）を肩にステッキを持つスタイルもどちらかと云えば18世紀風である。又，半ズボン（knee-breeches）

にストッキングをつけ，長いブーツを履くという型もヴィクトリア時代のものではなく，ルネッサンス期の変型であると思われる。こうして例をあげればかぎりなく出るが，彼の風変りな「審美的服装」も彼独自のデザインではなく，歴史研究の成果と云えるのである。もっとも今日のニュー・モードも大低は昔の流行に幾分新しいものを導入したものを循環させているだけであるから，ワイルドのものも彼独自のデザインと呼べるであろう。だが先に述べたような歴史趣味と19世紀中期の服装の低下を皮肉る意味をもって古い良き時代のものを持ち出したことは否定できない。だがただ無意味に，云い換えれば反抗と虚飾の美のみを求めて過去の遺物を彼は持ち出そうとしたのだろうか。それとももっと合理的な理由が別にあったのだろうか。そしてそれが彼の芸術観といかなるつながりをもつかという問題については第二章の(d)で述べることにする。

第二章　「ワイルドの衣裳論と芸術観の関係」

芸術とは実社会には無用のものであり，美しくありさえすればこれで十分であるとする考えは「ドリアン・グレイ」の序論を持ち出すまでもなく芸術至上主義者の特質であることはよく知られている。しかし我々はこれを文字通り受け取るわけにはいかない。彼等の云う無用とは第一義的に云って有用でないもの，つまり直接金儲けには関係のないものだけを指している。いわばこれも産業・商業中心の社会に対するレジスタンスであって，心の底では芸術こそ人間にとって最も有用であると考えているのである。このことは Charles Godfrey Leland に宛てた「教育における芸術の必要性」に関する手紙[21]などからでも容易に理解できるし，彼の講演集を見ればより明確に納得できるであろう。だが一般には彼の芸術や生活は非道徳とされ，世間から白い眼で見られていた。そしてその悪名は主に彼の「審美的服装」に端を発していたのである。なるほど彼の身なりは尋常ではなく，無用に飾り立て，美を誇示しすぎているという非難は免れまい。

そこでこの章では彼は衣服に関しては無用の美のみを追求していたのか否かという点についで考えたい（そしてこの問題は終局的に彼の芸術理論の裏づけとなると信じている)。

(a) 色彩について

オスカー・ワイルドの色彩論については私自身興味を示している問題であり，近いうちにくわしく調べたいと思っているが現在のところ未解決であり，又衣服の問題に限られた章であるから簡単に述べたい。

彼が衣服にカラフルなものを採用する動機はもちろん前章(f)で記述したとうりである。しかし彼の弁明は以外に素朴で生活に密着したものである。

> Perhaps one of the most difficult things for us to do is to choose a notable and joyous dress for men. There would be more joy in life if we were to accustom ourselves to use all the beautiful colours we can in fashoning our own clothes.[22]

美しい色の衣服を身につけるだけで人生そのものが楽しいものになるというのである。そして彼は明るい色はけばけばしいと思われがちであるが，そうではない，それは簡素が野卑でないのと同様であるという。[23] それでは具体的には一体どういう色を彼は美しい色と考えているのか。衣服については明確に立証する資料がうまく見つからないが *Art and the Handicraftman* (1882) に生活環境全般についての美的な色，つまり生活の美化と能率化を促進する色はどん色かを述べているのでそれを紹介したい。

> All beutiful colours are graduated colours, the colours, that seem about to pass into one another's realm——colour without tone being like music without harmony, mere discord.... You must teach him (workman) colours are graduated colours and glaring colours the essence of vulgarity.

ここで云う 'graduated colour' とはそばの色とうまく蝕和する優美な色のことで，日本の「ぼかし色」にあたるのであろうと思うが，何故この色がよいかというと，環境との調和の美を生み出すことのできる色だからである。この色を美とするワイルドは技巧的であるどころか全くの自然主義者なのである。何故なら秋の紅葉した樹木の間では枯木のような茶色を，春の緑輝く野辺には緑色を，夜の街には黒という風に自然環境に即した色調は雷鳥やカメレオンの姿を想像するからである。このように彼の提唱した色彩による調和の美は現代のトータル・ルックやインテリア・デザインの粋に通じるのもうなずけるのである。

(b) 合理性について

ワイルドの衣服における色彩感の根底は調和であった。調和とは自然であることを意味し，それは又合理性に通じるものである。従って美とはつまり合理性なのである。彼が1882年アメリカ講演の旅に出た時，彼が最も美的な服装だと感じたのはニューヨーク五番街のダンディーの着用しているものではなく，西部の鉱夫たちのそれであった。「縁の広い帽子は彼等を直射日光や雨から守るものであり，外套やブーツも彼等の仕事や生活にとって最も合理的で心地よくできている。心地よいものは美なのである」と彼は語っている。[24] 云い換えれば，衣服における美とは見せかけの美から生れるのではなく，衣服自身の持つ機能性（それぞれの生活に適合した）から生じるということになる。次の一節は彼の *Ideas upon Dress Reform* というエッセイからの引用であるが，上記の主旨をよく説明してくれるであろう。

The word practical is nearly always the last refuge of the uncivilised. Of all misused words it is the most evilly treated. But what I want to point out is that beauty is essentially organic; that is, it comes, not from without, but from within, not from

any added prettiness, but from the perfection of its own being; and that consequently, as the body is beautiful, so all apparel that rightly clothes it must be beautiful also in its construction and in its lines.

ここでも強調しているように'practical'というのは卑俗であるが'organic'は美に通じるという。恐らく前者は商業主義に結びつく用語であるのに対し，後者は人間が本来持つものである'organ'と結びつき，自然な美を生みすからなのであろう。いずれにせよ，美を機能性に結びつけているワイルドは合理的精神をも有していたことは知れよう。

(c) 流行と経済性について

これも「合理性」の問題とほぼ同じことが云えるようである。彼によると「経済性」こそ「神聖」であり「美」である。従って「醜」とは浪費にある（もっとも彼は屈指の浪費家であったから，理論どうり実生活をおくれなかったのは皮肉なことであるが）と云う。[25] 但しここでいう「浪費」とは衣服に多額の費用をかけすぎるという意味ではなく，醜く下劣なものを着ることを指しているのは云うまでもない。従って無意味に流行を追うことは愚であるということになる。そこで彼の「流行」についての意見を聞いてみよう。

What is a fashion? From the artistic point of view, it is usually a form of ugliness so intolerable that we have to alter it every six months. From the point of view of science, it not unfrequently violates every law of health, every principle of hygiene.[26]

美と機能性を求めて衣服が変化していくことを流行と呼ぶならば，その流行を追うのは正しい。しかし，ただ真新しいもののみを追求するためのものならば，流行を否定しなければならないというのである。ワイルドを含む世期末の唯美主義者たちが「ヌボー」（新しい）なるものを求め回って

いた姿は彼等の一つつの見栄であって，真の良識は上の一節に現われているようにも思える。再び話しは「流行」にもどる。彼は同時代の人々が流行を追っているのは滑稽とし，それを皮肉ると共に衣服生活の真のあり方を説く。「最近の女性はドレスをたった一度しか着ていないなどと自慢げに云っているのをよく耳にする。昔はそうではなかった。美しいデザインと優美な刺繍をほどこしたドレスなら女性は何度も何度も着て，その上それを自分の娘にさげ渡すのを誇りにしていたのである。[27]」ワイルドの衣裳は何か新しい流行を生み出さんがためのように思われがちであるが（結果的にはそれが流行を生み出しているけれども），実は美と機能性と経済性を重視し，同時代の流行を否定していたのである。引用は避けるが，流行についての細い点は *A Monstrous Fashion* や *Ideas upon Dress Reform* や *Woman's Dress* (Pall Mall Gazette 誌への寄稿）などで論じられている。例えば，ハイヒールの可否論，帽子の縁のあり方，ブーツの有用性，ドレスの腰まわりについて等々である。

(d) 古典趣味について

ワイルドの古典趣味については前章で触れたので，ここでは何故彼が古典的衣裳を推奨するかについて述べたい。*Woman's Dress* という寄稿論文（既出）に彼は「古代衣裳支持」の根拠をを明らかにしている。

I am not purposing any antiquarian revival of an ancient costume, but trying merely to point out the right laws of dress, laws which are dictated by art and not by archaeology, by science and not by fashion; and just as the best work of art in our days is that which combines classic grace with absolute reality, so from a continuation of the Greek principles of health will come, I feel certain, the costume of the futue.

以上の「弁明」を読んでみると，彼は無闇に古い時代の遺物のリバイバル

を望んでいたのではなく，合理性や機能性を備え，しかも（従って）美しい衣服はむしろ古い時代に認められたからなのである。しかし彼のこういった尋常以上に（世間体を無視してまで）合理性を追求するという態度には衣服と単なる生活必需品として扱うだけではなく，芸術的な何か，つまり古典的芸術作品の永遠性の如きものと見なしていたとも思えてならない。というのは，我々普通の現代日本人には江戸時代や明治時代に流行したものを，いくらそこに現代の衣服にない利点があることを知っていてもそれを着用する勇気はないはずである。それを敢えてなしたワイルドは芸術家気質であり，生活そのものの美化又は芸術化を試みた人間にふさわしいと言えよう。

(e) 衣裳と芸術について

第二章の題が「ワイルドの衣裳と芸術観の関係」であるから，この節(e)はいわばこれまでのまとめということになる。この章の初めに述べたとうりワイルドは「芸術のための芸術家」として無意味に近いほど美を求め，そのためには社会性をも無視した，非道徳な芸術家の一人と考えられている。事実そういった面は彼には多分にあった。しかし一方にはこれまで何度も繰り返したように極めて合理的な面もあったのである。「プラクティカル」なもの，「ユーズフル」なものを軽べつしながら，機能的な生活の価値を十分認めていた。ここに彼の二重性があるように思われるであろう。しかし，あの時代においては「プラクティカル」や「ユースフル」という言葉は我々現代人の感覚では想像できないほど卑俗で営利的な印象を与える力を持っており，「オーガニック」とは全然異なった意味を持つ，いわば嫌悪すべき流行語であったものと思われる。それでもやはり生活における合理性や経済性を追求すべしとしたワイルドはデカダンな放言をするワイルドと別な人格を持っている，つまり二重人格を持った人間だと解釈される可能性は十分ある。ヘンリー卿[28]やイリングワース卿[29]の精神が美し

く純朴な童話の世界と一致しないようである。だが彼等の口から出る非道徳な言葉は現実に対する皮肉であり，人間性の無視されつつある社会に対する痛烈な風刺なのである。言い換えれば純な人間性から発した非道徳だ。彼等のような人間は東洋の世界観では人里離れた山中に隠遁するタイプであるが，それとは逆に喋りまくるという陽の方向に出たにすぎない。その意味において型はちがっても彼等の世界も童話の世界も同一なのである。彼の童話は自分の子供に聞かせるのが直接の動機であったようだが，それらは決して子供が読んで面白いものではない。子供には理解できないほどの社会風刺が意図されていたからである。[30] 要するにワイルドの非道徳も道徳も起源は人間性にひそむ良心にかわりがなかった。[31] ユースフルなものを軽べつしながらも，ユースフル(機能的という意味で）な衣服を重視していたワイルドの姿は，毒気のあるデカダンの世界を創造しながら童話の世界を築いた文学者の象徴として私の目に映るのである。この意味で脇道にそれたと思える「ワイルドの身辺の芸術論」も彼の文学観を解釈する為の一つの鍵になるものと信じている。「衣」の項目の最後として次の事だけは付け加えておきたい。オスカー・ワイルドはあくまで「美の使徒」であり，美を根底としてすべてを考えていた。衣服の合理性や快感はすなわち美しい着物であり，住み心地のよい落ちついた家は美しい家であった。だが衣服に限らず「美」を捻出するためには社会通念を無視したために悪評を受ける結果となった。美しい想像力に富んだ作品を夢みて書いた「ドリアン・グレイの肖像画」が非道徳の汚名を着たように，美しい衣裳も生活も社会には受け入れられなかったのである。

× × × ×

当初オスカー・ワイルドの身辺の芸術についてすべて書くつもりでいたが，「衣」の項目だけで思いもかけないほどのスペースを取ったために断念せざるを得なくなった。次号ではその続編（「食」「住」「話術」「その他」）を掲載したい。　　昭和44年1月31日記

注

1. 'There was no pleasure I did not experience. I threw the pearl of my soul into a cup of wine' *Let.*, p. 475
2. 近年オスカー・ワイルドの両親の研究が相次いで出版された。
3. *Let.*, p. 475
4. Hesketh Pearson : *The Life of Oscar Wilde*, p. 44
5. 外科，耳鼻科，眼科の病院長で，Royal Irish Academy の副院長を兼ね，1864年にはナイトの称号を受けている。
6. Eric Lambert : *Mad with Much Heart* pp. 31—48
7. ブレモン伯爵夫人の説によるとワイルドは女性的霊魂の持ち主で「虚栄，形態の美，言語の音楽，色彩の調整，誘惑に対する弱さ，みだらな女のような衝動」はこれに起因するという。（平井博著「オスカーワイルドの生涯」）これもやはり幼児時代まで女児同然に育てられたことにも原因があるのではないだろうか。
8. Let., p. 61
9. H. Pearson : *The Life of Oscar Wilde*, pp. 44—5
10. Frank Harris : *Oscar Wilde*, 8章に 'He understood better than most men that notoriety is often the forerunner of fame and is always commercially more valuable' とある。
11. *Lady Windermere's Fan* の一幕にヴィクトリア朝教育を受けた典型であるウィンダミア夫人が世期末的人間ダーリントン卿に言うセリフもこの箇所の参考となろう。

    "Well, I have somthing of the Puritan in me. I was brought up like that. I am glad of it. My mother died when I was a mere child. I lived always with Lady Julia, my father's eldest sister, you know. She was stern to me, but she taught me, what the world is forgetting, the difference that there is

between what is right and what is wrong."

12. *Lady Windermere's Fan*, *A Woman of No Importance*, *Importance of Being Earnest*, *An Ideal Husband* の四篇

13. *Shoin Literary Review*, No. I でこの問題にふれた。

14. 岩波新書「近代絵画」

15. *Ibid.*, p. 8

16. ターナーの価値を認め，世に問うたのはジョン・ラスキンである。cf. *Modern Painters*

17. ワイルドと絵画の関係について，ここでは間接的なものしか述べなかったが彼は同時代の画家たち（ラファエロ前派の画家たち）の展覧会（The Grosvenor Gallery に於ける）に深い興味を示し，かなり多くの論文を残している（cf. *Painters and Pictvres* I., II., *Painters and Picture Lovers*)。又，「ドリアン・グレイの肖像画」の主要登場人物バジル・ホールワードもラファエロ前派系の画家であることは容易に察せられる。

18. 1871年の 'composition prize for greek verse', 1872年の 'Michaelmas prize', 1874年の 'Berkeley Gold Medal' らは皆古典語優秀につき與えられた賞である。

19. 1877年の春，

20. イタリーの古都ラヴェンナの印象をうたった詩「ラヴェンナ」は彼の処女作と云える。

21. *Let.*, pp. 117—8〔Circa 15 May 1882〕

22. *House Decoration*

23. *Art and the Handicraftman* に 'the simplicity must not be barrenness nor the bright colour gaudy.' とある。

24. *House Decoration*

25. *Ideas upon Dress Reform* に 'There is a divine economy about

beauty; it gives us just what is needful and no more; whereas ugliness is always extravagant; ...' とある。

26. *Suitable Dress for Women Workers*

27. *House Decoration*

28. *The Picture of Dorian Gray* 中の人物

29. *A Woman of No Importance* 中の人物

30. *Let.*, p. 221

31. *Shoin Literary Review* No. 2 で「耽美主義と社会性」と題してこの点に触れておいた。